

津久井湖の果たす役割

昭和40年に城山ダムが完成して以来、津久井湖は上流に降った雨を貯めることで、様々な役目を果たしてきました。

水の供給

ダム湖の役割の一つに、水道や工場へ用水を供給する水を貯める、ということがあります。

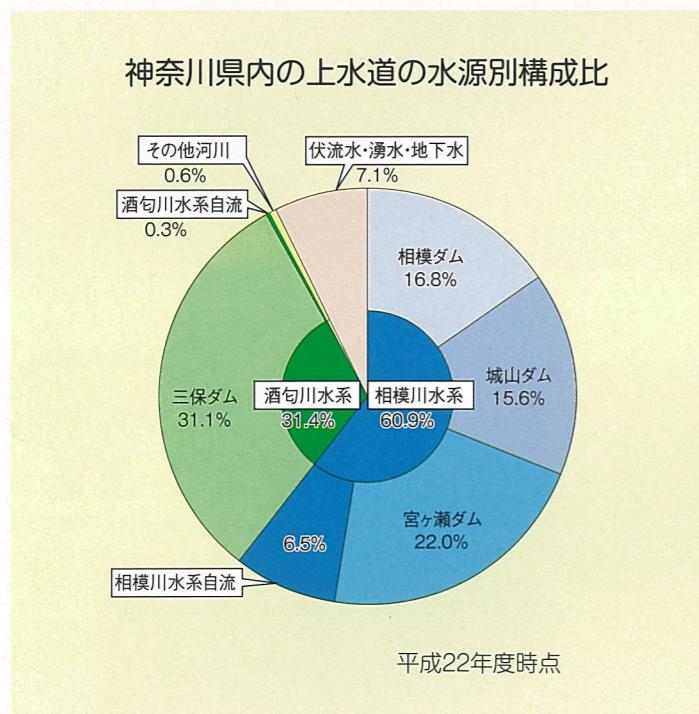
川は季節によって流れる水の量が大きく変わります。降水量の多い時期には水は豊富ですが、反対に降水量の少ない時期には利用できる水も乏しくなります。

そこで、大雨で川の水量が多いときにはダム湖に水を貯め、反対に川の水が少なくなったときにはダム湖に貯めておいた水を川に流すことで、安定して利用できる水を生み出すことができます。

神奈川の水利用は、大きくは相模川水系の水と酒匂川水系の水に分けられます。この2つの水系により、県内の水需要の9割以上がまかなわれています。

この相模川水系には城山ダム、相模ダム及び宮ヶ瀬ダム(国)が、また、酒匂川水系には三保ダムが築造されており、4つのダム湖は「かながわの水がめ」として大きな役割を果たしています。

津久井湖は、神奈川県内の上水道用水の水源のうち約16%を担っております。



津久井湖に貯めておいた水は、県内の4大水道事業者（神奈川県、横浜市、川崎市、横須賀市）に供給されています。沼本取水口等で取水した水を神奈川県、横浜市及び川崎市の水道へ、寒川取水堰で取水した水を、神奈川県、横浜市及び横須賀市の水道へ分水し、水道用原水として供給しています。

かながわの水がめ 概要図

